

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインと其中的漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

アレルギー総合ガイドライン 2022

一般社団法人日本アレルギー学会 アレルギー疾患ガイドライン委員会 (委員長: 東田有智 近畿大学医学部呼吸器・アレルギー内科)

株式会社協和企画 2022 年 10 月 7 日発行

Strength of Evidence

A (高い): 結果はほぼ確実であり、今後研究が新しく行われても結果が大きく変化する可能性は少ない

B (低い): 結果を支持する研究があるが十分ではないため、今後研究が行われた場合に結果が大きく変化する可能性がある

C (とても低い): 結果を支持する質の高い研究がない

Strength of Recommendation

1: 強い推奨 (recommend): 推奨された治療によって得られる利益が大きく、かつ、治療によって生じる負担を上回ると考えられる

2: 弱い推奨 (suggest): 推奨した治療によって得られる利益の大きさは不確実である、または、治療によって生じる害や負担と拮抗していると考えられる

Minds 掲載 無

■1 漢方薬 (地黄、葛根湯など)

疾患:

AERD

有効性に関する記載ないしその要約:

「AERD(NSAIDs 過敏喘息、N-ERD、アスピリン喘息)に対する使用可能な薬剤」に記載がある。

備考:

喘息長期管理薬の種類と薬剤の表中に、その他の薬剤・療法（漢方薬、特異的免疫療法、非特異的免疫療法）と記載されている。

■2 消風散、補中益気湯

疾患：

アトピー性皮膚炎

有効性に関する記載ないしその要約：

アトピー性皮膚炎の薬物療法の項に、下記の記載がある。

『漢方薬：アトピー性皮膚炎に対する漢方療法の有用性を検討した臨床研究の多くは、数十例程度の症例集積研究であり、RCT の中で国内の一般的な医療機関で処方が可能な方剤は「消風散」と「補中益気湯」のみである。前者はステロイド薬などの抗炎症外用薬による治療で皮疹が軽快しない例に、後者は「疲れやすい」「体がだるい」「根気が続かない」などアンケートで気虚を有すると判断した例を対象に、従来からのステロイドなどの抗炎症外用薬などによる治療と併用したところ、前者では有意な皮疹の改善がみられ、後者ではステロイド外用薬を減量できた。』

副作用に関する記載ないしその要約：

『甘草を含む方剤による偽アルドステロン症や、補中益気湯による間質性肺炎、肝機能障害、黄疸などの副作用が報告されており、漢方療法は漢方薬に習熟した医師のもとで行うべきと考える。』

■3 消風散、紫雲膏、小麦、胡麻、桃仁、山薬、阿膠

疾患：

食物アレルギー（副作用）

副作用に関する記載ないしその要約：

医薬品・生活用品に含まれる食物のアレルゲンの項に、下記の記載がある。

『漢方薬の中には小麦（該当生薬：小麦）、ゴマ（生薬名：胡麻）、モモ（該当生薬：桃仁）、ヤマモ（生薬名：山薬）、ゼラチン（生薬名：阿膠）などを含むものも存在する。特に消風散（胡麻を含む）と紫雲膏（胡麻を含む）は湿疹治療に使用されることがある』